

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

西洋のオセアニア観：フィールドからの手紙と器物：
ジョージ・ブラウンと「肘掛け椅子の人類学者」

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2010-02-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 林, 勲男 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00003506

フィールドからの手紙と器物

——ジョージ・ブラウンと「肘掛け椅子の人類学者」——

林 勲 男*

はじめに

I 19世紀の南太平洋における宣教師の活動

1 「高貴なる野蛮人」から「子供」へ

2 宣教師と博物学

II 宣教師ジョージ・ブラウン

1 ブラウンの生涯

2 博物学への関心

3 ヒューゲルとの出会い

III 博物学から人類学へ

1 民族誌標本の収集

2 英国人類学とブラウン

おわりに

はじめに

いわゆる「肘掛け椅子の人類学者」が、旅行家や植民地行政官そして宣教師などをつうじて、世界各地の文化に関するデータを収集していたことは、人類学史の常識となっている。しかしデータ提供者であった「現場の人びと」(men on the spot)の収集活動と、彼らの人類学に対する姿勢及び視点については、これまであまり研究されてこなかった¹⁾。その主たる理由として、人類学者はデータを収集して送ってきた人物について、著書や論文、講演の中で触れることはほとんどなく、またデータ提供者も、その記録をほとんど残さなかったという事実がある。

本稿では、当時のデータ提供者の一人として、19世紀後半から今世紀初頭にオセアニアで活躍したメソジスト教会宣教師ジョージ・ブラウン George Brown (1835-1917)を取り上げる。彼はエドワード・タイラー Edward Tylor やジェーム

* 国立民族学博物館民族社会研究部

Key Words : George Brown, missionary ethnography, armchair anthropologists, Polynesia and Melanesia

キーワード: ジョージ・ブラウン, 宣教師民族誌, 肘掛け椅子の人類学者, ポリネシアとメラネシア

ズ・フレーザー James G. Frazer らにオセアニアの人びとの器物を送り、手紙のやり取りなどを通じて民族誌データを提供していた。しかし、ブラウンは単なるデータ提供者に留まることなく、地理学や人類学の学術雑誌に論文を寄稿し、学会でも研究を発表していた。さらに、1886年の英国・アイルランド人類学会において、ブラウンの研究発表の原稿は、オックスフォード大学附属博物館の館長に就任して間もないタイラーが代読している。

当初、ブラウンがサモア諸島で布教活動を始めた頃、彼の関心事は鳥類を中心とした自然誌であり、1880年前後から彼は関心の対象を宗教を含めた民族誌の領域に移行させていった。そしてこれ以降、ブラウン自身は「骨董品/珍品」(curios)と呼んでいた民族資料を精力的に収集し始める。この小論の目的は、彼の関心の移行プロセスを追うとともに、英国人類学の黎明期に、オセアニアで活動したひとりの宣教師が民族誌データの提供を通じて、「肘掛け椅子の人類学者」とどのような関わりを持っていたかを具体的に明らかにすることである。

ジョージ・ブラウンに関する資料は、当時のデータ提供者の中では例外的に多く残っており、管理も十分になされている。ブラウンは生前に自伝(1908)と民族誌(1910)を著わしており、彼の日誌と書簡がオーストラリアのニュー・サウス・ウェールズ州立ミッチェル図書館に保管されている。また、彼が撮影した約900枚のガラス乾板が、同じくシドニーにあるオーストラリア博物館に収蔵されている。さらに、彼が南太平洋の島じまで布教活動に従事していた当時に収集した自然誌標本は、英国、オーストラリア、ニュージーランドの博物館や大学に保管されており、民族誌標本のほとんどはジョージ・ブラウン・コレクションとして国立民族学博物館が所蔵している(石森 1999a; 石森・林 1999)。

I 19世紀の南太平洋における宣教師の活動

1 「高貴なる野蛮人」から「子供」へ

南太平洋でのキリスト教の伝道活動をいち早く開始したロンドン伝道協会(London Missionary Society, 以下では L.M.S. と記す)²⁾は、19世紀にはいると『布教のスケッチ』というパンフレットの定期刊行を始めている。これは協会員と協会活動の支持者に向けて、海外での宣教活動の進展状況を伝えることを目的として始まったものである。パンフレットには図版も頻繁に掲載され、先住民による儀礼、「偶像」、

キリスト教を受け入れた住民の姿や、「偶像」を火中に投げ込む住民の姿などが紹介された。

やがて L.M.S. のこうした出版物以外に、布教地に赴任した宣教師みずからが執筆した書物が出版されるようになり、そうした書物は、当時の布教地の様子を知る貴重な資料となった。しかし、たとえばジョン・ウィリアムズ John Williams の『南海諸島の布教事業物語』(1837)などは、L.M.S. の活動を支持する読者を対象に、太平洋における伝道活動を強くアピールすることを目的としていたため、撲滅すべき異教の文化に対する偏見が強く現れていた。さらに、ウィリアムズは数多くの「偶像」をキリスト教布教の成果として収集し、ロンドンの本部へ送っていた。すなわち、キリスト教が先住民に野蛮性 (heathenism) を放棄させた証拠物として「偶像」を取り扱うことで、これらの「偶像」に新たな意味を付与したのであった (Edmond 1997: 114)³⁾。

19世紀前半当時、ジェームズ・クック James Cook の航海の関連書籍を含め、一般向けに出版されていた南太平洋に関する書物の挿し絵では、18世紀末に形成された南太平洋の「高貴なる野蛮人」像はすでに姿を消し、南海の「野蛮人」の暴力的で粗野な側面が強調されたものとなっていた (Smith 1985: 317-324)。しかしながら、宣教師にとって、南太平洋の島々の住民は暴力的で粗野ではあるが、決して敬遠すべき存在ではなく、西洋人と同じ人間性を持ち、神の恩寵を待つ存在と考えられていた。彼らは高度な文明の祝福を待つ従順な人びと、あるいは、成長と共に社会化されるであろう子供の姿として捉えられていた。子供と同様に、彼らも成長し、成熟し、そして文明化されると考えられたのである (Edmond 1997: 110-112; Thomas 1994: 133)。しかし見過ごしてはならない重要な点は、南太平洋の住民は成長し、文明化されてゆく存在ではあるが、自身の力でそれを成し遂げることはできず、万人の父である神の導きが必要だと、宣教師たちは捉えていたことである (林 1999a)。

2 宣教師と博物学

南太平洋でのキリスト教の伝道活動が徐々に成功をおさめるにつれ、1820年代から1830年代にかけて、博物収集家たちがヨーロッパから海軍軍人や探検家などとともに島じまを訪れるようになる。そして彼らの多くが、現地で布教に従事していた宣教師を頼って収集活動をおこなっていたのである。

1820年代後半に英国からオセアニアへやって来た博物収集家に、サミュエル・スタッチバーリ Samuel Stutchbury とヒュー・カミング Hugh Cuming がいた。二人と

も後に『種の起源』を発表するチャールズ・ダーウィン Charles Darwin にデータを提供し、彼の研究の発展に貢献した人物である。スタッチバーリは、1825年に真珠採集船に乗り、南太平洋で多数の貝を採集している。その採集の際、彼は各地で宣教師を訪ねている。ソサエティ諸島では、チャールズ・バーフ Charles Barff (フアヒネ島) やチャールズ・ウィルソン Charles Wilson (タヒチ島)、そしてジョン・ウィリアムズ (ライアテア島) から L.M.S. の宣教師たちに、現地での助手や通訳を手配してもらっていた。カミングもまた、1827年にソサエティ諸島、オーストラル諸島、トゥアモトゥ諸島で貝類を中心とした収集を実施しているが、この時に、ソサエティ諸島の宣教師バーフは通訳を務め、潜水夫の手配もしている。また、ウィルソンも潜水夫や案内人の世話をしていた (Gunson 1994: 288-291)。このように、南太平洋の島々でキリスト教の布教活動に従事していた宣教師たちは、博物収集家たちに現地の様々な情報を提供し、収集活動の援助をしていたのである。

しかしながら、博物収集家たちの標本採集調査が、現地の宣教師の協力に負うところが大きかったにもかかわらず、その事実を含めて収集活動の実情が学者たちによって言明されることはほとんどなかった。そして19世紀中頃からは、宣教師の中には動植物だけでなく現地の言語、さらには民族誌データを採集し、英国本国の研究者に情報を提供する者も現れてきた。人類学の分野では、こうした宣教師たちが送った情報の受け手こそ、「肘掛け椅子の人類学者」と呼ばれる人たちであった。しかし、データの提供を受けた人類学者たちは、そうしたデータの入手経路については研究の中ではほとんど言及しなかった。宣教師自身が書き残した日誌や書簡類だけが、赴任地でのデータ収集活動と本国の学者との関係を如実に語るものであり、そこから我々は、彼らの具体的な協力の様子や、彼らの持っていた知識の一端を知ることができるのである。

II 宣教師ジョージ・ブラウン

1 ブラウンの生涯⁴⁾

ジョージ・ブラウンは、1835年にイングランドの北東海岸の港町バーナード・キャスルに生まれた。20歳の時、彼は当時英国の植民地であったニュージーランドへ渡った。このとき彼には確固たる目的があったわけではない。ニュージーランドへの入植者が多く乗った船には、宣教師の一団も乗船していた。ブラウンは航海中に彼らが催

していた聖書の読書会とマオリ語の授業に参加している。

ニュージーランドに到着すると、ブラウンは北島東部のオネハンガに住むメソジスト教会の牧師を務める伯父の元に身を寄せた。そして、その伯父の助言に従い、オークランドのウェズリー・カレッジで神学を学ぶようになる。やがてブラウンは、フィジー諸島で宣教師として布教活動に携わることを希望し、1860年、オーストラリアのシドニーで開催されたオーストラレーシア・メソジスト伝道協会 (Australasia Wesleyan Methodist Missionary Society) の本部会議で、宣教師となることが正式に認められた。

そして、ブラウンは、ニュージーランドのワインガロの牧師の娘と結婚し、新妻を伴って最初の伝道地へ向かう。それは当初希望していたフィジー諸島ではなく、サモア諸島であった。ブラウンはサモア諸島での伝道の傍ら、サモア語のもつ微妙な表現に強い関心を抱き、言語の習得に努めると同時に、様々な自然誌標本の収集にも努力した。ブラウンは、14年間サモア諸島で布教活動に従事した後、家族をいったんニュージーランドに送り届け、次の伝道地であるビスマーク諸島へ赴く。彼はシドニーからビスマーク諸島への旅の途中、先ずフィジー諸島に寄って9名のフィジー人牧師を、次いでサモア諸島で2名のサモア人牧師を選抜し、彼らと共に1874年にニューブリテン島とニューアイルランド島の間に位置するデューク・オブ・ヨーク諸島のポート・ハンターに宣教の拠点を築く。

ところが1878年4月、フィジー人牧師のうち4名が、ニューブリテン島のプランシェ湾内陸部で殺害される事件が起きた。ブラウンは西洋人商人たちと協議の上、銃で武装した追討団を組織し、宣教師殺害に加担した集落を襲撃して家屋に放火し、数多くの人命を奪った。この報復行為は、虐殺事件としてオーストラリアではマスコミも取り上げ、伝道協会本部内でもブラウンへの批判が起こる。しかし事件の調査にあたったフィジーの検察はブラウンを起訴せず、裁判が行われることはなかった。

赴任してから7年後の1881年、ブラウンはシドニーにある本部へ呼ばれ、伝道協会の要職を歴任する。また、1884年から3年間はアメリカ合衆国と英国を訪れ、各地での講演会やメソジスト教会の総会への出席などの職務をこなした。オーストラリアへ帰国後は、伝道協会の太平洋地域での宣教活動の最高責任者となり、トンガ王国における紛争の調停、英領ニューギニアの東部地域やソロモン諸島での伝道拠点の建設にも尽力した。

ブラウンは1908年には自伝を著し、1910年にはメラネシアとポリネシアの文化比較民族誌を出版している。また、彼は布教活動に従事していた当時から博物収集家とし

でも知られ、1917年に彼が亡くなったときには、自宅に南太平洋の島々で集めた3,000点を超す民族誌標本資料が残されていた。これらが、今日ジョージ・ブラウン・コレクションとして世界的に注目されている民族資料となっている。

2 博物学への関心

約20年間にわたる島々での伝道活動は、ブラウンを博物学への関心に目覚めさせた。最初の赴任地のサモア諸島では、彼の関心事は鳥類、とりわけオオハシバト (*Didunculus Strigirostris*) にあった。それというのも、この鳥は1839年に初めて記録されたばかりで、オレンジ色の大きな鉤状の嘴をもつ外見、サモア諸島のサヴァイイ島とウボル島に限られる生息地、原産地不明などの点から、当時、多くの鳥類学者たちの注目を集めていたからである。

1863年、ブラウンはトゥフ地方の首長ラヴェラヴェから1羽のオオハシバトを生きたまま受け取ることに成功し、それをシドニー経由でロンドンへ送ることを試みた。ところが、この鳥を乗せた船には、偶然にもサモアの英国領事ウィリアムズ Williams が乗り合わせており、彼はシドニーに到着するとこの鳥をオーストラリア博物館のジョージ・ベネット George Bennett へ渡してしまう。するとベネットはこの貴重なオオハシバトを自分からの寄贈資料としてロンドンの動物学協会へと送ってしまったのである⁵⁾。資料提供についてブラウンの許可もなければ、彼の名前すら言及されることもなかったのである (Fletcher 1944: 108-110)。しかし、ブラウンの博物資料収集への情熱と各分野への貢献は、その後も決して衰えることはなかった。彼は、サモア諸島で採集した数多くの自然誌標本を、ニュージーランドやオーストラリアの博物館や知人に送っている (Brown to Day, 15 Nov. 1871; Brown to Firth, 30 Aug. 1870, 20 July 1871, 10 Nov. 1871)。当時ブラウンが、いかに自然誌標本の採集に熱心であったかは、ブラウンの後継者である宣教師ダックス Benjamin Danks⁶⁾ が収集家クラインシュミット Kleinschmidt⁷⁾ から聞いた話として、次のように紹介している。

「クラインシュミットが語るところによると、シドニーやクックタウンそれに他のところでも、我々の宣教師の評判は非常によくない。我々が交易を行い、もっとも価値のある珍品を手に入れるために信徒を利用している、と一般に思われている。ブラウン氏はニューブリテン島民の魂よりも、新種の蛇や鳥、昆虫に自分の名前が付けられることのほうに関心を抱いているのは確かだ、と彼 (クラインシュミット) は言う。… (中略) …ブラウン氏は博物学者のために新天地を切り開いただけでなく、重要な

発見も数多くした。そのために彼は羨まれたのである」(Deane 1933: 76)

1874年7月、サモア諸島での14年間の伝道活動を終えてシドニーへ帰る途中、ブラウンはフィジー諸島で英国王立学術協会 (the Royal Society) から派遣された学者たちの調査隊と出会う。一行を率いていたのは、エディンバラ大学博物学教授のトムソン Wyvill Thomson であった。ブラウンは長時間にわたりトムソンと情報交換をし、サモア諸島で自分が採集した自然誌標本の一部をトムソンに譲り渡している (Brown Journal, 31 July 1874)。この経験によってブラウンは、さらに研究心をあおられたものと思われる。しかしながら、トムソンは調査報告書の中でこれらの標本の出所を明らかにすることはなかったし、ブラウンとの交流もその後は絶えてなかった (Fletcher 1944: 106-107)。オオハシバトの件と同様に、トムソンへ自然誌の情報を与え、なおかつ自分の標本の一部を譲ったことを、もしブラウンが日誌の中に記録していなかったなら、他の多くの宣教師による学者への貢献と同様に、この協力関係は永遠に知られないままであった可能性は高い。

サモア諸島におけるブラウンの活動で、注目しておくべきことは、サモア語修得のための彼の努力であろう。なるべく英語を使わず、サモア語を用い、サモア語の聖書から自分がよく知っている節を暗記し、大声で繰り返し唱えた。毎日の朝食の後、道端に座って人びととの会話の時間を持ったり、数日間ボートで出かける場合には、英語が全く話せない者を伴って行った。そして、着任の8週間後には日曜日の礼拝をすべてサモア語でおこなえるまでになった。サモア語が上達するに従って、ブラウンはこの言語の持つ表現の豊かさにさらに興味をかき立てられていった (Brown 1908: 31-34)。ブラウンのこの言語能力は、後に彼がオセアニアの民族誌を論じるとき、大きな自信を与えると同時に、彼の研究の評価を支えるものもなった。

3 ヒューゲルとの出会い

サモア諸島での布教活動を終えた後、ブラウンはビスマーク諸島での布教を開始するための募金の目的で、1874年にオーストラリア南東部とニュージーランドの諸都市をまわる講演の旅をおこなっている。彼はこの時、訪れた土地の博物館や図書館、そして植物園を精力的に訪ね関係者に会うことで、ますます博物学への関心を深めていったと考えられる。たとえばメルボルンではヴィクトリア植物園の前園長で、政府おかけの植物学者フェルディナンド・フォン・ミュラー Ferdinand von Mueller に面会している (Brown Journal, 27 Oct. 1874, 28 Oct. 1874, 29 Oct. 1874)⁸⁾。またオーストラリア博物館でオーストラリア人としての最初の館長となったエドワード・

ラムゼイ Edward Ramsay (在職 1874-1894) とともに、この時に面識を得ていた可能性は高い。なぜならブラウンは翌年にビスマーク諸島に到着するやいなや、鳥類学者のラムゼイに標本資料を送っているからである (Brown to Ramsay, 3 Sept. 1875; Strahan *et al.* 1979: 37-38)。そして、1874年12月、ブラウンは太平洋地域を旅行していた若き博物学者アナトール・フォン・ヒューゲル Anatole von Hügel と、メルボルンからニュージーランド南島の南端にある港町ブラッフまでの旅をともにする。これをきっかけにブラウンは、ビスマーク諸島へ同行したいというヒューゲルの申し出を受けることになった (Brown to Chapman, 28 Jan. 1875)⁹⁾。

ブラウンはビスマーク諸島における布教のための要員を募る目的で、1875年4月27日にシドニーを出航し、先ずフィジー諸島に向かった。そのジョン・ウェズリー号には、ヒューゲルと彼の2人の助手、さらには、4年間のオーストラリア滞在を終えてフィジー諸島に帰るロリマー・フэйソン牧師 Lorimer Fison も乗船していた (Brown 1908: 71)。当時のフィジー諸島は、彼らが到着する7カ月前に、英国の植民地となっただけであった。

ヒューゲルはブラウン同様に鳥類標本を収集していたため、その点でお互い意気投合したのかもしれない。しかしヒューゲルは、自然誌と民族誌の標本の収集家でもあった父親の影響もあり、彼自身も民族誌標本の収集にも情熱を傾けていた。そして彼の収集方法は、当時の宣教師や入植者たちが単に「未開」や「野蛮」を表象する「骨董品/珍品」(curios) として民族誌標本を収集していたのとは大きく異なっていた。ヒューゲルは収集品の現地名、材料、交易品としての重要性なども入念に記録していたのである。当時のフィジー諸島の入植者たちの中にも、現地の物質文化に興味を持ち、住まいの居間に数点のコレクションを飾っている者もいたが、彼らのほとんどの収集品は武器や「食人用フォーク」など、いかにも「Cannibal Feeje」を表象するものであった¹⁰⁾。それに対してヒューゲルは、日用品や装飾品、武器など生活の様々な場面で使用されていたものを、広範囲にわたって収集することに努めていた (Thomas 1991: 164-170)。ヒューゲルはまた、ラボック John Lubbock やタイラーが最新の研究の中で、言語学や民族学のデータを物質文化と関連させて、有史以前の人類の生活を論じていたことも詳しく知っていた¹¹⁾。

メルボルンからニュージーランドのブラッフまで、そしてシドニーからフィジー諸島までの船旅を共にする中で、ブラウンとヒューゲルは自然誌や民族誌に関する知識や情報を交換したのであろう。この間に当時の学問の動向について、ブラウンはヒューゲルから多大な刺激を受けたのではないだろうか。フィジー諸島到着後、ブラウンは

ビスマーク諸島での布教活動のための要員を募ることに奔走していたが、それでもヒューゲルを近隣の島を訪ねる小旅行に誘っている (Brown to von Hugel, 7 June 1875)。

しかし、ヒューゲルとブラウンら宣教師たちとの関係は、常に良好なものでもなかったようである。ブラウンは妻への手紙の中で「(ヒューゲル) 一行が我々に同行しないことを願っている。彼 (ヒューゲル) はファイソン氏と口論となった。我々にとって彼は苦勞の種となるのではないかと心配している」 (G. Brown to L. Brown, 24 May 1875) と書き、さらにその3週間後には「ヒューゲル男爵を好きになれない。彼はつまらない男であり、嫌な性格の持ち主である」 (G. Brown to L. Brown, 13 June 1875) とまで書きしるしている。

ビスマーク諸島へ向けて出発する前日、ヒューゲルは体調が思わしくないため、フィジー諸島に留まることをブラウンに伝えた (Brown to Chapman, 14 June 1875)。しかしヒューゲルの鳥類標本の採集を担当していた助手クッカエル Cockerell と写真家ウォルター Charles Walter は、翌日、ウェズリー号に乗船し、ヒューゲルと別れてブラウンたちと共にフィジー諸島を後にした。新たな赴任地での布教活動の忙しさを思っか、ブラウンはクッカエルが鳥類標本の製作を手伝ってくれることと、ウォルターから写真技術を学べることを喜んでいた (Brown to Buddle, 30 June 1875)¹²⁾。9名のフィジー人牧師と、途中でさらにサモア諸島から2名のサモア人教師が合流し、一行はビスマーク諸島へ向かった。

Ⅲ 博物学から人類学へ

1 民族誌標本の収集

ブラウン一行はサモア諸島を経由して、1875年8月に新たな伝道基地となるデューク・オブ・ヨーク諸島のポート・ハンターに上陸する。デューク・オブ・ヨーク諸島は、ニューブリテン島とニューアイルランド島の間にある小さな島々から構成されている。ジョン・ウェズリー号がシドニーに向けて出航するまでの3週間の間、ブラウンは博物標本の採集を精力的におこなった。ロンドンの王立動物学協会の事務局長スクレイター宛には、航海途中で集めたオオハシバト3羽、オウム2羽、大型のオウム1羽、鳩2羽、それにヒクイドリ2羽を船に積み込み (Brown to Sclater, 5 Sept. 1875)、オーストラリア博物館館長ラムゼイ宛には、リュウケツジュ属やクロトンノ

キ属などの植物標本を荷箱1個分送っている (Brown to Ramsay, 3 Sept. 1875)。

ブラウンの最初の1カ月は、ほとんど島民との物々交換に充てられたと言っても過言ではない。彼がこうした物々交換に使用していたのは、ビーズや針、手斧、ナイフ、布地などである。ブラウンの収集活動を見てみよう。ブラウンは自伝の中で、2種類の民族誌標本資料についてだけ、収集の様子について詳細に述べている。一つは「人骨を付けた槍」であり、もう一つは石灰石像 (*kulap*) で、共にニューアイルランド島のものである。

ニューアイルランド島を初めて訪れたとき、一行は海岸で武装した男たちと遭遇する。その時、ブラウンは男たちに歩み寄り、彼らが手にしていた槍やその他のものを物々交換した。こうして入手した槍のほとんどの一端には、「人間の脚あるいは腕の骨」が付いており、通訳に尋ねると、これらの骨は沿岸部の住民と内陸部の住民の戦争の結果、食人がおこなわれ、残った骨を槍に使用していることが解った。この時に集めた槍はポート・ハンターへ帰る船から海中に落として紛失してしまう (Brown 1908: 125; Brown Journal, 25 Oct. 1875)。しかし、彼はその後、一端に骨を使用した同様の槍を数多く収集しており、国立民族学博物館が所蔵するジョージ・ブラウン・コレクションにもこの種の槍が42本含まれている¹³⁾。

ニューアイルランド島のカルルという村で、長老たちは村の近くにある楕円形に囲いを巡らした場所にブラウンたちを連れていった。そこは女性や子供にとっては、禁制の場所であった。その中の端の方に大きな家屋があり、内部には男女を現した2体の石灰石像が置かれていた。また、ここの人びとは住居の中に、より小さな石灰石像を置いていた。ブラウンは大型の石像を何体か買い取ることにした。しかし運び出すには、女性や子供の目に触れぬように、夜間にそっと村人とともに実行に移さねばならなかった (Brown 1908: 127-128)¹⁴⁾。

同じ頃、ブラウンは自分のコレクションの対象として、ビスマーク諸島での民族誌標本の収集を開始したと思われる。オークランドに住む妻に宛てて「槍と棍棒一束と雑貨」の入った荷箱を送り、そのうちのフィジー諸島の棍棒2本と、束になっている棍棒と槍の中から最良のもの4、5本は残しておくようにと手紙で指示している (G. Brown to L. Brown, 22 Aug. 1875)。

標本資料を収集し博物館などに寄贈する以外にも、博物館からの依頼を受けて収集することもあった。たとえばオーストラリア博物館からも収集の依頼を受けたが、その背景には次のような事情があった。1879年から1880年にかけて開催されたシドニー博覧会には、当時オーストラリア博物館が所蔵していた標本資料が展示された。とこ

ろが1882年9月22日の夜、火事が発生したのである。博覧会は1880年4月に閉幕していたが、会場となったガーデン・パレスに博物館の民族誌標本と工業技術に関する資料がそのまま保管されていたのである。ガーデン・パレスは全焼し、約2,000点の民族誌標本もすべて灰となってしまった。これにより館長のラムゼイは、翌年、829ポンドを民族標本資料の購入に充てたのだが、この時、収集を依頼された一人にブラウンがいたのである。彼は、ニューアイルランド島の石灰石像、ニューブリテン島の槍40本、ニューアイルランド島の槍100本を収集し、オーストラリア博物館へ送っている。

当時、博物館のキュレーターや人類学者は、コレクションの欠落部分を補ったり、理論を構築するための実証的資料として、民族誌標本資料を入手するか少なくともその情報を探し求めている。19世紀の後半には、多くの自然科学者が南太平洋や他の地域で収集調査を実施するようになっていたが、人類学者は、そうした自然科学者よりも、長期間にわたって現地に滞在し、現地語を習得し、人びとの生活と深い関わりを持っていた宣教師により強い信頼を置いていた (Stocking 1987: 79)。

ビスマーク諸島到着後まもなく、ブラウンはオーストラリア博物館のラムゼイ宛てに植物標本を送ったことはすでに述べたが、1876年には、オークランド博物館へ蝶や貝殻、魚類、トカゲなどの100点を超す自然誌標本資料に加えて、約70点の民族誌標本資料をも寄贈している (Auckland Museum 1876)。また彼自身、1877年2月に王立イングランド地理学会、同年5月には王立タスマニア学会、さらに、会員となった時期は不明であるがオーストラリア学術振興協会の会員となって¹⁵⁾、自然誌標本や民族誌標本を、それぞれの機関や親交のあった会員へ寄贈していた。また、オークランド博物館キュレーターのチーズマン Thomas Frederic Cheeseman¹⁶⁾ へは、人間の頭骨の前面部に粘土と樹脂を塗りつけて作ったニューブリテン島の仮面 (*lorr*) を贈っている (Brown to Cheeseman, 9 Sept. 1878)。同様の仮面は王立タスマニア学術協会に対しても5個を寄贈している (Certificate from Royal Society of Tasmania, dated 26 May 1879)。

この頃よりブラウンは、積極的に民族誌標本資料と手紙を博物館や大学などの研究者に送り届けている。そして彼の民族誌標本の収集活動は、現地の人びとの生活全般にわたっていた。つまり、「野蛮」や「未開」を表象したり、キリスト教布教の成果を示すものとしてのみ、人びとの生活の中で用いられていたものを収集していたのではなく、当時の西洋文化の影響を示す器物をも含めて、実に様々なものを集めている¹⁷⁾。おそらく、ヒューゲルとの出会いが、ブラウンに大きな影響を与えていたので

はないだろうか。

2 英国人類学とブラウン

1870年、ジョン・ラボックは『文明の起源と人間の原始的状態』を著した。その中でラボックは、人類は人種・民族に関わらず、その生物学的レベルにおいては単一的存在であり、文化的相違を人類進化の時間軸の中に位置づけて捉えるとの立場をとった。ブラウンは1879年に、デューク・オブ・ヨーク諸島のポート・ハンターで『文明の起源』を読んでいる。そして、サモア諸島の L.M.S. 宣教師ジョージ・プラット George Pratt へこの本を薦め、自分が14年間サモア諸島に住んでいる間に、ラボックのような視点から研究を行わなかったことを嘆いた (Brown to Pratt, 4 Apr. 1879)。しかしプラットは、次のような批判的な返事を書いている。ラボックの著書の中で用いられている民族誌データの不備は、データ収集者の不十分な言語能力によるものであり、人間は時間の経過とともに進化するとの前提も、時として人間は墮落し、神の存在という知識を失い迷信に走ることもある、という事実に対して無知か無視によるものであると¹⁸⁾。

(1) ポリネシアとメラネシア

ブラウンは、14年間のサモア諸島滞在と、5年間のビスマーク諸島滞在中で、民族の相違を社会・文化的に解明する際に、ポリネシアとメラネシアの文化に関する重要な1次資料を提供できると、この頃に悟ったと思われる。実際、ブラウン以前の宣教師では、サモア諸島に38年間住み、ニューヘブリデス諸島のタンナ島に1年間滞在した L.M.S. の宣教師ジョージ・ターナー George Turner¹⁹⁾を除いては、ポリネシアとメラネシアの両地域に長期間にわたって居住した者は他にはいなかった。

東オセアニアと西オセアニアの相違点は、クックの航海の時にすでに認識されていたが、ポリネシアとメラネシアの二つの地域が、人種的に民族誌的に異なっていることが明確に概念化されるのは、1830年代になってからであった。そして、それぞれの地域の住民たちは、形質的外見、言語などにおいて比較された。「肌の色はさほど黒くなく魅力的なポリネシア人と色が黒く醜悪なメラネシア人」、「近似的な言語が話されるポリネシアと多様な言語のメラネシア」、「来客に対し手厚いもてなしをするポリネシア人と反抗的で敵対的なメラネシア人」など、そこにはより好ましい存在としてのポリネシア人像が形成された (Thomas 1997: 133-150)。言語以外の両者の特徴付けには、もちろんキリスト教をはじめとする西洋文化の受容の程度、という歴史的状

況にもとづく価値判断が混入していたことは明らかである。

ブラウンは、1877年に王立地理学会誌 *Journal of the Royal Geographical Society* に発表した論文の中で、次のように述べている。ニューアイルランド島民の男性の多くは身長が6フィート以上あり、強健でしなやかな身体を持ち、女性たちは若いときに重い荷物を運ばねばならないため、成長が阻害されている。しかしそうした女性たちの中には、かわいらしい顔立ちをした者もいる。ニューブリテン島のスペイシャス湾岸の住民は、近隣の島民と比べ色がより白く、髪の毛もさほど縮れていない (Brown 1877: 145)。また、サモア語、フィジー語、デューク・オブ・ヨーク語、トンガ語の語彙を比較し、それらの類似性を指摘している (Brown 1877: 146-148)。それは同時に、当時のポリネシア人とメラネシア人の相違に関する定説に疑問を投げかけるものでもあった。

(2) タイラーとの交流

1886年12月に開催された英国・アイルランド人類学会の例会において、エドワード・タイラーはブラウンの発表原稿「バプア人とポリネシア人」を代読している。タイラーは1883年にオックスフォード大学博物館の館長となり、その翌年からは人類学の講師を務めていた。ブラウンとタイラーの最初の接触は、1881年にブラウンが貝貨をタイラーへ贈ったことに始まる。この貝貨はニューブリテン島では *tabu* もしくは *tambu*、デューク・オブ・ヨーク諸島では *divara* あるいは *diwara* と呼ばれており、マングローブ地帯に産するムシログイを籐の外皮を細長く剥いたものに通してある (Errington and Gewertz 1995: 54)。この贈り物は、メラネシア人に対するポリネシア人の卓越性を受け入れていた英国人類学に対する、ブラウンなりの挑戦であったように見える。タイラーはブラウンへの返事の中で、この貨幣は彼ら島民の粗野な生活状況 (*rude condition*) と驚くべき対照をなしている、とまず述べ、島民がマレー人との交易から貨幣を学んだという証拠がないかを問い合わせている (Tylor to Brown, 23 Sept. 1881)。

この頃すでに、タイラーはブラウン以外の宣教師とも交流しており、その成果はブラウンにとっても見逃せないものであっただろう。フィジー諸島のウェズリー派宣教師ファイソンとソロモン諸島で伝道に携わっていたメラネシア宣教師団のコドリントン Robert H. Codrington は、タイラーと書簡を交換し、民族誌データ収集の役割を担っていた。また、コドリントンは1883年に英国へ一時帰国した際に、オックスフォードでタイラーの講義を聴講している。ブラウンもラボックの著作を読んだだけでなく、

こうした宣教師の学術貢献にも刺激されていたに違いない。またファイソンとホイット Alfred W. Howitt によるオーストラリアのアボリジニに関する研究『カミラロイとクルナイ』(1880) も、ファイソンが同じウェズリー派の宣教師で、フィジー諸島に赴任していたこともあり、おそらく早い時期に、ブラウンは彼らのこの研究を読んでいたものと思われる。

そして、ブラウンは1887年にメソジスト伝道協会の事務局長に就任してからも、タイラーとの通信をはじめ、英国学術振興協会への出席(1888年)、フローレンス博物館のキュレーターであるギゴリ Henry Gigholi との交流(Gigholi to Brown, 4 December 1885; 19 Nov. 1886; 1 Mar. 1895; 24 July 1896など)と、伝道協会の要職にありながらも人類学、博物学において活発な活動を続けていった。

1910年、ブラウンが出版した『メラネシア人とポリネシア人』は、タイラーが中心となって編集した「人類学調査手引き」(Notes and Queries in Anthropology)に基づき、ブラウンがビスマルク諸島に滞在しているときに調査したデータを用いて書いたものである(Brown 1972: vi)。彼はその中で、食人行為は「半神聖な儀式」であり、死者の霊に対する義務を免れるために行うと述べるなど(Brown 1972: 140-1)、それまで「野蛮」を表象するものとしてのみ捉えられてきた行為を、民族誌の脈絡の中に置き直している。この比較民族誌を書くにあたって、フィジー諸島のファイソンやポーウェル、サモア諸島のブラット、キリウィナ島のブロミロウなどの宣教師たちから、ブラウンはデータの提供を受けていた。

お わ り に

ジョージ・ブラウン(1835-1917)とエドワード・タイラー(1833-1917)はまさに同時代を生き、一方は民族誌データの収集という一端に位置し、他方はその集積と理論化というもう一方の端に位置していた。タイラーは学問のまさに中心に位置し、世界中に張り巡らしたネットワークの末端から彼のもとに民族誌データが送られてきた。しかし「肘掛け椅子」とフィールドを結びつけるには、「調査手引き」に従ってデータを収集させ、後に手紙のやり取りで補足をするだけでは決して十分とは言えなかった。現地に長期間滞在し、現地語を習得した宣教師たちは、行政官や短期間訪れて採集調査を実施する学者たちよりも、人類学者のもとに送る民族誌データに関して高い信頼が置かれていた。しかし、彼らが「未開の迷信」を根絶することを使命としていたことにより、データがゆがめられる大きな可能性を常に含んでいたことになる。

1888年と1898年にトレス海峡調査隊を組織したハッドン Alfred C. Haddon は、民族誌調査実施の緊急性を感じ、珊瑚礁の構造と形成過程という本来の調査の傍ら、トレス海峡の物質文化についても調査した。彼はその時に「調査手引き」を持参していたのである (Stocking 1995: 100)。そして、この調査隊に参加したセリグマン Charles G. Seligman とリヴァース William H. Rivers は、「フィールドワーク」に基づく研究をおこなう人類学者の育成に大きな貢献を果たしたのであった。民族誌データが、人類学者自身の手によって収集され始めようとしていた。

ハッドンの第1次調査隊が英国に帰国する2カ月ほど前の1889年2月、ブラウンはシドニーで質問リストと1通の手紙を受け取る。差出人は、ジェームズ・フレーザー。フレーザーはタイラーの『原始文化』を読んで感動し、ケンブリッジ大学トリニティ・カレッジで学んだ後、同じカレッジのフェローとなっていた。手紙には、今にも無くなってしまいそうな慣習や迷信を記録しておくことの重要性が述べられ、宣教師をはじめとする「現場の人びと」による調査実施の緊急性が訴えられていた (Frazer to Brown 9 Feb. 1889)。

謝 辞

シドニーのミッチェル図書館でジョージ・ブラウンの日誌、手紙、写真を閲覧した際には、写真部門のキュレーターであるアラン・デイヴィス氏に便宜を図っていただいた。また、ブラウンからオークランド博物館への寄贈物のリストは、国立民族学博物館のピーター・マシウス氏から、トーマス・チーズマンに関する情報は、オークランド博物館民族学部門のメガン・バイルズ氏から、パラマタにあるユナイティング教会文書館保管のジョージ・ブラウン・コレクション・リストは、ラ・トローブ大学のヘレン・ガードナー氏から、それぞれ提供していただいた。なお、ミッチェル図書館での調査は、トヨタ財団研究助成「メラネシアの近代史と異文化像の形成」(助成番号96-A-214)により実施した。これらの方々と関係機関にこの場を借りて深謝したい。

注

- 1) 19世紀後半に太平洋諸島で伝道活動に従事し、モルガンやタイラーにデータを提供しただけでなく、理論的にも少なからず影響を与えた宣教師にファイソンとコドリントンがいる。ファイソンはブラウンと同じウェズリー派に所属し、1863年にフィジー諸島に赴任した。1871年から4年間はオーストラリアに住み、その間にモルガンの要請で、オーストラリア先住民の親族組織について調べ始めたのを契機として、クラスとトーテムによる分類に関する集中的な調査を実施した。その成果は後にホウィットとの共著『カミラロイとクルナイ』(1880)として発表された。コドリントンはメラネシア伝道団に所属し、ファイソンとは1872年から1890年まで手紙で連絡を取り合った。コドリントンが収集した言語と民族誌に関

- するデータを、1881年にファイソンがタイラーへ送ったのをきっかけとして、コドリントンとタイラーの親交が始まった。コドリントンが1883年、英国に一時帰国したとき、オックスフォードでタイラーの講義を聴講している。彼は1885年に『メラネシアの諸言語』、1891年に『メラネシア人：人類学と民俗学における研究』を出版した。ファイソンとコドリントンのそれぞれによる研究及び両者の関係と比較については Kuper (1988) と Stocking (1987, 1995) に詳しい。
- 2) 1795年に設立されたロンドン伝道協会の創設者たちは、出版されたジェームズ・クックの航海記録を読み、バウンティ号事件のウィリアム・ブライに話を聞き、タヒチ島こそ福音を伝道すべき異教の地と考えた。そして設立の翌年に、30名からなる伝道団をダフ号でタヒチ島へ派遣した。
 - 3) L.M.S. 本部も伝道地からの器物の収集に努め、世界各地の宣教師から送られてきた器物は伝道協会の博物館に展示されていた (オールティック 1990: 341-343; Thomas 1991: 153-156)。
 - 4) ジョージ・ブラウンの生涯については、すでに石森が詳細に紹介しているので (石森 1988; 1999b)、ここではごく簡単にスケッチするだけにとどめておく。
 - 5) ベネットはオーストラリア博物館の初代館長を務め、1853年から1874年までは同館の理事を務めていた。その間、1863年、1866年、1873年には理事長となっている (Strahan *et al.* 1979: 27, 161)。
 - 6) ダンクスは、ブラウンの後継者としてビスマルク諸島で宣教活動をおこない、1907年にはブラウンの後を継いでメソジスト教会の事務局長となる。
 - 7) クラインシュミットは、ハンブルクのゴデフロイ博物館の委託を受け、サモア諸島で標本採集をしており、この点ではブラウンとはライバルでもあった。
 - 8) ミュラーのもとには、特にニューギニアに赴任した L.M.S. の宣教師から多くの植物標本が送られてきた (Gunson 1994: 298)。
 - 9) ヒューゲルは後にフィジー諸島の民族誌標本の収集家として知られるようになり、ケンブリッジ大学の考古学人類学博物館のキュレーターとなる。
 - 10) フィジー人の食人習慣は、白檀やナマコを求めてやってきた船員や捕鯨船の乗組員たちによって、19世紀前半にはすでに英国にも知られていた (橋本 1996: 51)。また、ウェズリー派の宣教師トーマス・ウィリアムズは、1835年から1853年までのフィジー諸島での生活をもとに『フィジーとフィジー人』(1858)を著し、その中で、人間の墮落した姿としてフィジー人の「食人」「妻の伴死」「戦争」を記述している。
 - 11) ラボックの『文明の起源と人類の未開的状态』は1870年に、タイラーの『原始文化』は1871年に出版されていた。
 - 12) ウォルターは、旅行写真家としてヴィクトリアとニュー・サウス・ウェールズで活動していたチャールズ・ウォルターと思われる (Davies and Stanbury 1985: 248)。ブラウンは、デューク・オブ・ヨーク諸島に到着してから、妻への手紙の中で次のように書いている。「ウォルター氏の写真機材一式を買い取った。必要な修理を施した後で、練習するつもりだ」(G. Brown to L. Brown, 8 Sept. 1875)。ブラウンがウォルターから写真機材を入手した経緯については、ずっと後になってからブラウンが講演の中で触れている (Webb 1995: 60)。
 - 13) 「人間の脚あるいは腕の骨」を一端に使用した槍は、食人習慣が存在する証であるとの記述は、ブラウンは日誌の他の箇所でも繰り返している (Brown Journal, 3 Dec. 1875)。しかし、野林の分析によると、これらの骨は人間の大腿骨及び脛骨のほか、ヒクイドリなどの大型鳥類の脛骨、カンガルーなどの大型動物の中足骨に分類できるという (野林 1999)。
 - 14) ブラウンは自伝の中で、こうして入手した石灰石像は1882年のガーデン・パレスの火災で焼失したことを述べているため (Brown 1908: 128)、オーストラリア博物館へ送られたものと思われる。
 - 15) 1898年のシドニーでの第7回大会で、ブラウンは研究発表をおこなっている。
 - 16) チーズマンは英国旧ヨークシャー州出身。幼い頃に両親と共にニュージーランドへ渡る。独学で植物学者となり、1874年にオークランド博物館のキュレーターに任じられる。1923年に亡くなるまでこの職にあった。
 - 17) ブラウンの収集の意図に関しては、Eves (1998) と Rubel and Roseman (1996; 1998) の論争がある。ジョージ・ブラウン・コレクションの中には、西洋文化との接触を示す器物として、西洋婦人の帽子を模してココヤシやパンダナスの葉で作った帽子や、西洋人の姿を刻

- 画した石灰入れなどがある(石森・林 1999: 143-363; 吉田・マック 1997: 167; 169)。
- 18) プラットからの返事は、ブラウンが彼に送った1879年4月4日付けの手紙をタイプし直したものの後ろに、日付なしのノートとしてタイプされている。ブラウンは自分の研究のために、この2通の手紙の内容をタイプしておいたものと思われる。
- 19) ジョージ・ターナーは、1841年から1859年まで、タンナ島での1年間を除いて、サモア諸島で過ごした。その経験に基づいて、1861年に *Nineteen years in Polynesia: missionary life, travels, and researches in the islands of the Pacific*. を著している。彼はさらに21年間サモア諸島のウポル島に居住した。

文 献

Auckland Museum

1876 *Donation Book*. Auckland Museum.

Brown, George

1877 Notes on the Duke of York Group, New Britain, and New Ireland. *The Journal of the Royal Geographical Society* 47, 137-150.

1908 *Pioneer-Missionary and Explorer, an Autobiography: A Narrative of Forty-eight Years' Residence and Travel in Samoa, New Britain, New Ireland, New Guinea and the Solomon Islands*. London: Hodder and Stoughton.

1972 *Melanesians and Polynesians: Their Life-Histories Described and Compared*. New York: Benjamin Blom, Inc. (originally published in 1910).

Codrington, Robert H.

1885 *The Melanesian Languages*. Oxford: Clarendon Press.

1972 *The Melanesians: Studies in Their Anthropology and Folk-lore*. New York: Dover. (originally published in 1891).

Davies, Alan and Peter Stanbury

1985 *The Mechanical Eye in Australia: Photography 1841-1900*. Melbourne: Oxford University Press.

Deane, Wallace (ed.)

1933 *In Wild New Britain: The Story of Benjamin Danks, Pioneering Missionary*. Sydney: Angus and Robertson.

Edmond, Rod

1997 *Representing the South Pacific: Colonial Discourse from Cook to Gauguin*. Cambridge: Cambridge University Press.

Errington, Frederick K. and Deborah B. Gewertz

1995 *Articulating Change in the "Last Unknown"*. Boulder and Oxford: Westview Press.

Eves, Richard

1998 Commentary: Missionary or Collector? the Case of George Brown. *Museum Anthropology* 22(1), 49-60.

Fison, Lorimer and A. W. Howitt

1967 *Kamilaroi and Kurnai: Group Marriage and Relationship, and Marriage by Elopement, Drawn Chiefly from the Usage of the Australian Aborigines, also the Kurnai Tribe, Their Customs in Peace and War*. Oosterhout: Anthropological Publications. (originally published in 1880).

Fletcher, Brunsdon

1944 *The Black Knight of the Pacific*. Sydney: Australasian Publishing Co.

Gunson, Niel

1994 British Missionaries and Their Contribution to Science in the Pacific Islands. In R. Macleod and P. F. Rehbock (eds) *Darwin's Laboratory: Evolutionary Theory and Natural History in the Pacific*, pp. 238-316. Honolulu: University of Hawai'i Press.

橋本和也

1996 『キリスト教と植民地経験——フィジーにおける多元的世界観』京都：人文書院。

林 勲男

- 1999a 「南海の失楽園——西欧近代におけるタヒチへのまなざし」春日直樹編『オセアニア・オリエンタリズム』pp. 53-80, 京都：世界思想社。
 1999b 「宣教師と博物学——ジョージ・ブラウンの博物収集の歴史的的位置」石森秀三・林勲男編『ジョージ・ブラウン・コレクションの研究』（国立民族学博物館調査報告10）pp. 25-48, 大阪：国立民族学博物館。

石森秀三

- 1988 「福音と殺戮，そして民族学——ジョージ・ブラウンの生涯」『民博通信』40, 40-60。
 1999a (編) 『南太平洋の文化遺産——国立民族学博物館ジョージ・ブラウン・コレクション』大阪：千里文化財団。
 1999b 「ジョージ・ブラウンの生涯」石森秀三・林 勲男編『ジョージ・ブラウン・コレクションの研究』（国立民族学博物館調査報告10）pp. 5-24, 大阪：国立民族学博物館。

石森秀三・林 勲男（共編）

- 1999 『ジョージ・ブラウン・コレクションの研究』（国立民族学博物館調査報告10）大阪：国立民族学博物館。

Kuper, Adam

- 1988 *The Invention of Primitive Society: Transformations of an Illusion*. London and New York: Routledge.

Lubbock, John

- 1870 *Origin of Civilisation and the Primitive Condition of Man: Mental and Social Condition of Savages*. New York: D. Appleton and Company.

野林厚志

- 1999 「槍に使われた人骨とその虚像性——ビスマルク諸島の資料の分析を中心として」石森秀三・林 勲男編『ジョージ・ブラウン・コレクションの研究』（国立民族学博物館調査報告10）pp. 109-115, 大阪：国立民族学博物館。

オールティック, R. D.

- 1990 『ロンドンの見世物』Ⅱ（小池慈監訳）国書刊行会。

Rubel, Paula G. and Abraham Rosman

- 1996 George Brown, Pioneer Missionary and Collector. *Museum Anthropology* 20(1), 60-68.
 1998 Response to Richard Eves. *Museum Anthropology* 22(1), 61-63.

Smith, Bernard

- 1985 *European Vision and the South Pacific (2nd edition)*. New Haven and London: Yale University Press.

Stocking, George W. Jr.

- 1987 *Victorian Anthropology*. New York and London: The Free Press.
 1995 *After Tylor: British Social Anthropology 1888-1951*. Madison: University of Wisconsin Press.

Strahan, Ronald et al.

- 1979 *Rare and Curious Specimens: An Illustrated History of the Australian Museum 1827-1979*. Sydney: Australian Museum.

Thomas, Nicholas

- 1991 *Entangled Objects: Exchange, Material Culture, and Colonialism in the Pacific*. Cambridge and London: Harvard University Press.
 1994 *Colonialism's Culture: Anthropology, Travel and Government*. Cambridge: Harvard University Press.
 1997 *In Oceania: Visions, Artifacts, Histories*. Durham and London: Duke University Press.

Turner, George

- 1861 *Nineteen Years in Polynesia: Missionary Life, Travels and Researches in the Islands of the Pacific*. London: Snow.

Tylor, Edward B.

- 1929 *Primitive Culture: Researches into the Development of Mythology, Philosophy,*

林 フィールドからの手紙と器物

Religion, Language, Art and Custom. 2 Vols. London: Murray. (originally published in 1871).

Webb, Virginia-Lee

1995 Illuminated Views: Photographs of Samoa by Rev. George Brown. In C. Blanton (ed.) *Picturing Paradise: Colonial Photography of Samoa, 1875 to 1925*, pp. 59-68. Florida: Daytona Beach Community College.

Williams, John

1837 *A Narrative of Missionary Enterprises in the South Sea Islands*. London: J. Snow.

Williams, Thomas

1858 *Fiji and Fijians*. 2 vols. London: A. Heylin.

吉田憲司・ジョン・マック編

1997 『異文化へのまなざし——大英博物館と国立民族学博物館のコレクションから』大阪: NHK サービスセンター。

未出版資料

Brown, George

Letterbook 1876-1880, MLA1868-3 (Mitchell Library, Sydney)

Scientific and Ethnological Papers, MLA1868-22 (Mitchell Library, Sydney)

Papers 1879-1917, ML MSS 952 (Mitchell Library, Sydney)

新聞

Sydney Morning Herald, 9 April 1917.